

# 蒜山酔路

宰府 俤

道徳的な社会生活を日々精進されておいでになる世の皆様方に対して、この稿をお見せすることは、些か私の心の一隅にあるだろう善なる意識が許さない様な気がしています。しかし此の許さざる生活信条の人々以外に幾人かの不善をなす輩があるであろう事を希って、酒の肴に一目投じて頂けるならば、9月20日の今日1日は只今筆をとる私にとって最上の日でありましょう。

かつて酒宴の一夜、処女なる酒をくみかわし酒の精なる神の予言に五体を捧げ、友にアルコールによいしれた脳細胞の働きを記録せしめた当時の思い出をしのびながら、走り書きの筆を進めております。

大体、酒が入れば醜態を筆に托する習慣性を自認しておりますので御容赦の程願います。9月17、18日の両日に亘って、草地実態調査が蒜山高原の自然草地において、農林水産技術会議の研究テーマとして行われました。

農技研、農林省地域農試、県農試、その他20人余りの草地にいどむ人々によって、1本1草を分類し、土壌調査を行って自然草地の生態学的な結論(?)を求めて研鑽を積んでおいででした。そうしてその疲れをいやすに1杯のコップをかわしたのは、つい一昨日のことでした。此の様なまことに基礎的な陽の目をみざるが如き人々の雰囲気に、言い知れない学問の底の深さ、けわしさを知らされながらも、或はその学習行動に対する認識不足に原因した反ぱつの態度かも知れないけれども、農民の生活経済の飛躍的な向上を祈ればこそ、その生態学的な草地の全ぼうが如何にあれ、その日の出来事がシンキ臭いと論じて、如何なる生態をとる自然草地でも徹底的な破壊と牧草の導入による人工草地の造成が経済性の高い家畜の飼養にとっては絶対のものであると自認し、その日の酒宴に大口言をはき百鬼夜行を演じました。

翌日、さまざまのしくじりに恥かしく頭を下げて青菜に塩の五体をひこづりつつ、蒜山地区のジャージー牛飼育農家、経営共進会の自給飼料対策の部門審査にうろつき廻りました。個々の農家におけるその対策は、

従前の経営組織の切りかえの過途期とて、さまざまの複雑なケースが展開され、蒜山酪農業がはらむ容易ならざる現実を再認識しました。

乳牛導入後3ヶ年を数えるこの地の酪農は、先進地の酪農ならざる副業の範囲に歩みするみじめさは認められず、その限りにおいて前途に真の酪農業の芽ばえが感じられたのですが、個々の経営主が更に経営全般からの視野に立った運営を今後に期待したいと思ったのです。ともあれ酒気の抜け気らない五体と空ポの頭に感慨深きものがあり、19日の夜のとぼりがはりめぐらされたのちまでも、よろこびの此の一日をしみじみと味ったのでした。

そうして、職場に積み重ねられている業務のあることを知りつつも、20日蒜山原を南下、旧二川に東洋のピラミッドと目される意欲的な草地造成の息吹を身に感じつつ入りました。この村において、急傾斜牧野の草地造成に関する大々的な試験研究を依頼されておりましたので蒜山分場のK君と村入りしたのです。幹線道路に沿った急傾斜地の地肌は、諸々に緑の草原と化しつつあるこの現実、まさにオドロキ以外のなものでもありませんでした。農業技術研究所の山田豊一先生から、オーストラリアにおいても、同じ地形の傾斜地を改良して、ラヂノクローバーその他の牧草が生育しているというお話を聞き、彼の国と自然条件、社会条件がちがうにしてもその改良の方向が相似ているということは、私共に力強い示唆となったのでした。

この村の口八丁手八丁の実力者Nさんは、10ヶ年10頭の酪農計画をうちたて、昨年、今年とすでに6反歩の急傾斜牧草地の造成をなしとげ階段状にオーチャードグラスとラヂノクローバーのテラスが設けられ最近3番刈で坪2貫匁の生草収量をあげその意気まさに天をつくものがありました。

4回刈取2,000貫の牧草収量は確実のように見うけられました。雑木とクマサザに覆われた此の山が1、2年ののちに驚異すべき生産力をあげているのです。

しかし、Mさんの此の成果のかげにかくれた一言

## 岡山畜産便り1957.10

「年間2,000円の肥料代」はゲニ山地酪農家にとって忘れうべからざる、そうしてたゆまざる努力において果されなければならいと痛感しました。

此の一言は草地にいどむすべての農民の脳裡に刻みこまれなければならない辞でなければなりません。

「ヤア、ヤア」と声を掛け合いつ二川の酪農家に幾人かあううち、Mさんは無論Nさんも村の指導者Kさんも口を揃えて、こう訴えていました。

我々は「面会謝絶をしなければならない」と。聞いてその意の奈辺にあるかとまどったのですが、此の春以来、此の地を訪れる人々はすでに2,000人を満しているが最早参観人の方々を御案内するには時間が無いというのでした。

我々は、今日も明日も新しい知識を求めて働かなければならない。而してそのための自由な時間を与えてくれというわけです。

「面会謝絶」の意がようやくわかるような気がしました。

ひる前のバスで二川をはなれ津山に向って一路南下しましたが、湯原町平津に至る二川線をはさんだ山々には人々の鍬をふる姿があちこちに見うけられました。

9月20日、津山駅発午後7時9分の自動車はすでに弓削駅を通過し一路岡山に驀進しています。

津山での畜魂祭の祭酒の加勢で書きしるしました。酔筆もようやくオミキの薄らぐにつれ鈍くなって来ました。

昨日、彼の地の人々が訴えるが如くに語った面会謝絶がいつも気に入り、ここに再び面会謝絶の木札をかがげて筆を擱きましょう。

酔筆の戯れ 御寛容を

「9月20日車中にて」